

「トモダチ作戦」

地震発生後 24 時間以内に米軍隊及び航空機、艦艇等が被災地に配備されました。最大値で、兵員約 24,000 人、189 機の航空機及び 24 隻の海軍艦艇が人道支援と災害救援活動に参加しました。

国防省の救援活動は“Friend”の日本語を用いて「トモダチ作戦」と命名されました。米軍の迅速な対応力は、海からの極めて重要な支援及び仙台空港に設営された救援基地からの救援物資の配送を可能にしました。ひどく被災した地域の生存者に物資を届けるために米空軍の輸送能力が特に重要でした。米軍の救援活動として、救援物資、自衛隊員及び機器の輸送、取り残された犠牲者の捜査の為に被災地の調査、及び被災した飛行場のような重要な公共施設の復旧が重点的に行われました。壊滅的で多面的な災害への効果的な対応を可能にしたのは、当該地域における自衛隊及び米軍基地の既存の基地の構成でした。北東日本の青森県に在る米軍三沢基地は地震によって激しく揺れましたが、被害は極めて小さなものでした。三沢基地は米軍及び自衛隊の前方作戦基地として使われました。

多年の共同訓練、共に運用可能な資材、機器等によって、同盟国のまとまった活動が容易に行われました。「トモダチ作戦」は、危機に対応する為に、初めて自衛隊のヘリコプターが米原子力空母を活用した作戦となりました。原子力空母ロナルド・レーガンは、自衛隊及び海上保安庁のヘリコプターの給油基地及び航空作戦のプラットホームとなりました。他の米国艦艇は、被災地へ自衛隊員及び機器を輸送しました。ドック型の水陸両用揚陸艦トーテュガ（TORTUGA）は、90 台の自衛隊トラック及び約 300 名の陸上自衛隊員を災害救助活動の為に本州北部に輸送しました。その輸送終了後、トーテュガはヘリコプターの任務の為、機動的な活動拠点としての役割も果たしました。

同盟国軍の間の意思疎通は非常に効果的に行われたとの軍関係者の評価を得ました。史上初めて、米軍の部隊が日本の指揮所の下で実際の活動に運用されました。特に専従の連絡将校がスムーズな意思疎通を助けました。3名の海上自衛隊幹部が原子力空母レーガンに乗艦し、並行して3名の米海軍連絡将校が日本艦ひゅうがに乗艦しました。自衛隊員で構成された少人数のグループは、仙台北空港当局とひどく被災した滑走路の再開を支援する海兵隊の救援活動を調整しました。米軍は極めて重要な役割を果たしましたが、日本政府が主導していることを強調するように心がけていました。

米軍が果たした主要な役割の中で特筆すべきものは、被災地への救援物資をより多く輸送するために不可欠となる飛行場と港の再開でした。地震の直接の影響によって仙台空港は大きな被害を受けており、津波による被災の翌日、空港はまだ水深 8 フィートの中がありました。沖縄に本拠地を置き、戦争地域に前方供給基地を設営することを専門とする米国特殊作戦グループは、滑走路上に流された 5,000 台以上の車両を含むがれきを除去する作業を開始し、その後他の航空機が着陸できました。約 260 人の海兵隊員が自衛隊員と共に協力して働きました。3 月 15 日、仙台空港は初めて救援物資を受け取ることが出来、4 月 13 日には民間航空会社の営業飛行が再開されました。同様に米軍は更なる救助物資配送センターを設営する為に、津波によって甚大な被害を被った八戸港、宮古港、大島港をかたづけ、使用可能にしました。

(訳：植田 和男)